

1946年3月の櫻島の噴火

本 多 彪*

1. 1939年10月～1946年3月の櫻島の火山活動

1939年10月26日3時ごろ、櫻島は1914年噴火の東側割目上海拔約700mあまりの地点から噴火^{(1),(2),(3)}して、同年11月9日ころまで噴煙・鳴動・爆音、夜は赤熱噴石・火柱がみられる程度の活動をした。

この噴火口は以後活動し続け、1946年3月の噴火もこの火口で起った。おもな活動は次のとおりである。

1940年には、4月24日に鹿児島市に少量の降灰があり、6月下半期には噴煙・爆音・噴石、大隅半島側に降灰があった。

1941年には、4月28日夜に砲声様音・噴煙降灰・赤熱噴石が鹿児島市から観測され、5月には数回噴煙降灰、5月29日～6月14日には赤熱噴石・火柱があり、その後は衰えた。

1942年には、7月16日に噴石、大隅半島に音響・空振・降灰砂があった。

1943年2月4日・2月12日・3月26日・10月6日・11月28日に黒灰色煙を噴出して、やや活気を呈したが、他の月はおだやかであった。

1944年には、1月に灰色煙を少量噴出した程度であって、他の月も活動はおだやかであった。

1945年には、おおむね白煙をあげ、10月ごろは白煙も山頂上に現れなくておだやかであったが、6月10日・8月2日・11月10日・11月12日・11月20日・11月23日・12月3日・12月6日には鹿児島測候所で弱鳴動が聞えた。

1946年には、1月30日7時45分、海拔1,500mの高さまで噴煙、午後鹿児島市に降灰があり、2月はおおむね海拔1,500～2,500mに達する灰色煙を噴出し、鹿児島市に22日・24日および25日に降灰、25日には窓ガラスが「ガタガタ」するほどの空振があった。

3月中はおおむね灰色煙、11日および13日には黒灰色煙を海拔1,000～2,500mの高さに噴出して、鹿児島市に降灰があり、6日には同市に空振があった。

この火口の東方約4.3kmにある東海岸の黒神では、1945年9月末には、鍋山ふもとで竹林の竹の葉が灰色になる程度の降灰があり、1946年1月半ばごろから毎日「ドーン、ドーン」という音響をたてて10～15分間ごとに黒煙を噴出し、1月30日ころから2月12日まで夜は赤熱噴石

* 中央気象台地震課

がみとめられた。

この火口の南方約 2.7km にある南海岸の有村では、1月30日3時30分ころ、雷雨とまちがえるほどの噴火があり、黒煙を噴出し、噴火が大きいときには火柱が現れた。

以後2月にわたる活動時には、毎日 3～10回ほどずつ海拔約 1,500m の高さまで黒煙を噴出し、同時に 30～40cm 最大約 1m の噴石、夜は赤熱噴石を最遠 1km に投出する程度の活動がみられた。

2. 1946年3月の櫻島の噴火

(1) 1946年3月9日～24日の櫻島の噴火

1946年3月9日には、降雨のために櫻島は不明がちであったが、15時23分に鹿児島測候所で海拔約 3,000m に達する櫻島の多量の灰色煙が観測され、鹿児島市に降灰があった。

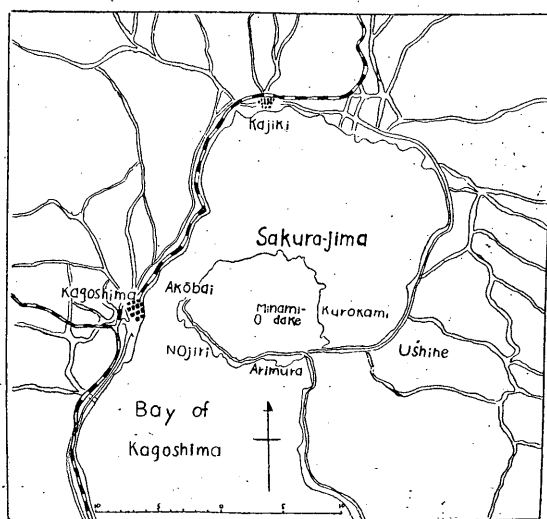
黒神方面では、夜は約3時間ごとに「ドーン、ドーン」という音響とともに火口から赤熱噴石があがるのがみられ、22時ごろには火口の北北東 5km の高免^{Kōmen}で「ドーン、ドーン」という音響が聞え、ガラス戸が「ビリビリ」と振動した。

有村では、鳴動が聞え、噴煙がみられた。

3月10日には、櫻島山頂部に雲がかかっていたので、鹿児島市から噴煙も観測されなかったが 17時40分ころ火口の北 18km の加治木町^{Kajiki}では「ドーン」という音響があり、戸障子が「ビリビリ」と振動した (Fig. 1)。

有村では、鳴動が聞え、噴煙がみられた。

Fig. 1. Index map of Sakura-jima



3月11日には、15時32分に櫻島の濃い黒灰色煙が海拔 2,000m まで上昇するのが鹿児島測候所から観測され、夜には鹿児島市に降灰があった。

この日、有村では、3時ごろから音がして、黒煙・噴石、夜は赤い火柱と赤熱噴石がみとめられ、黒神では、この活動がほぼ連続的に行われたのがみとめられた。

加治木町では、「ドーン」という音響は10日より大きく感ぜられた。

3月12日には、雲霧のため、鹿児島測候所から櫻島の噴火の様子は不明であったが、火口の西 5km の赤水では「ドーン、

「ドーン」という遠い砲声様音が聞え、やや強い SO₂ 臭があり、加治木町では、「ドーン」という大きな音響が聞えた。

3月13日には、7時52分鹿児島測候所で櫻島の濃い黒灰色煙が海拔2,200mにあがるのが観測され、市内に降灰があった。

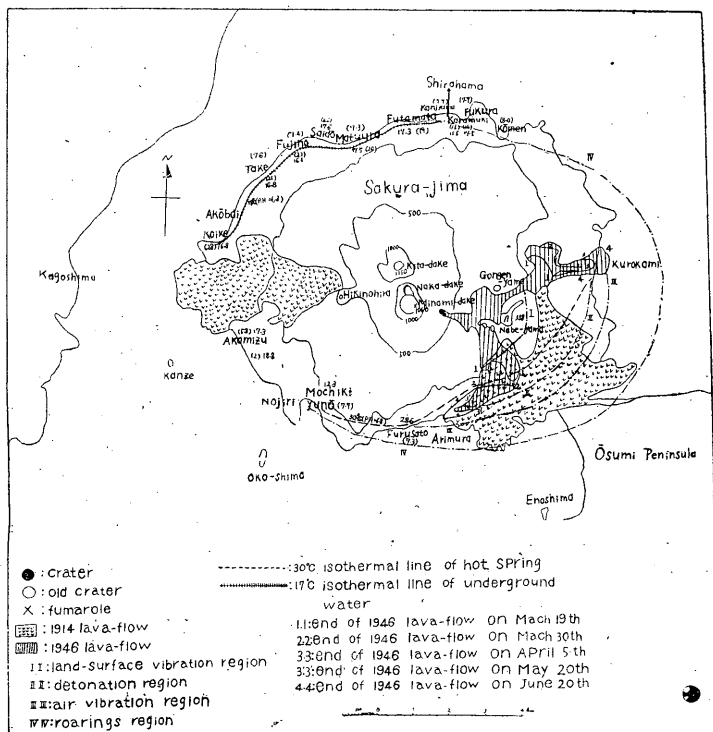
赤水では、「ドーン、ドーン」という遠い砲声様音が聞え、やや強い SO₂ 臭があり、加治木町では、「ドーン」という大きな音響が聞えた。

3月14日～3月19日は、雲のため鹿児島市から櫻島の噴煙は見えなかったが、15日には同市で砲声様音が聞え、16日には降灰砂のために同市は灰色にぬりつぶされた。

加治木町では、「ドーン、ドーン」という音響は10日・11日・12日・13日を大きくなり、14～16日が最も盛んで、18日ごろから衰えぎみになり、20日にやや盛んになったが、23日から衰えて、3月25日～3月31日程度の活動状態になった。

(2) 1946年3月25日～31日の櫻島の噴火 (Fig. 2)

Fig. 2. Volcanic activity, 1946 of Volcano Sakura-jima



この間、火口の東側約 2.5km の I I 線上附近有村側地点では、約 10 秒ごとに「ドン、ドン」という普通程度の音、普通程度の空振、極微弱な地響きがあり、そのつど噴煙とともに 50~60cm の黒色熔岩片約 300 個が約 100m の高さまで投出され、「バタン、バタン」という弱い音をたてて斜面上に落下した。この噴石の水平最遠到達距離は 500~1,000m であった。この噴石の毎噴出の噴出初速度・噴出勢力を算出すれば、

$$\begin{aligned} V_0^{(2)} &= \cos i \cdot \sqrt{\frac{g X_m}{1 + \sin i}} \\ &= \cos 30^\circ \cdot \sqrt{\frac{9.8 \times 500}{1 + \sin 30^\circ}} \\ &= 65 \text{ m/s} \end{aligned}$$

計算の簡単のために、噴石は 1 辺が 50cm の立方体の熔岩片とすれば、毎噴出に $50^3 \times 300 \text{ cm}^3$ 、新熔岩の比重 = 2.28 であるから、揮発成分があまり失われない岩しよう体状のときには 2.3 として、その質量 $M = 8.7 \times 10^7 \text{ gr}$,

$$\begin{aligned} \text{その噴火のエネルギー } E &= \frac{1}{2} \times 8.7 \times 10^7 \times 6500^2 \\ &= 1.8 \times 10^{16} \text{ erg.} \end{aligned}$$

このとき、火口の東方約 4km の距離まで砲声様音、約 4.5km まで空振、約 5km まで鳴動が観測された。

夜は、黒神で「ドーン、ドーン」という普通程度の音、弱空振をたてて、噴煙とともに火花のように赤熱噴石——毎噴石約 300 個——火口上約 10m の高さまで赤色噴炎があがり、噴煙柱仰角 30° の高さまでやや赤い火柱が生じた。

3 月 25 日~31 日のこの調査期間中の風向は西寄りと北寄りであったので、Fig. 2 のように地響域 II I, 砲声様音域 II II, 空振域 III III, 地鳴域 IV IV はおもに櫻島の東~南側に現れた。

3. 1946年の新熔岩流

(1) 噴出時期：3 月 9 日は雨がちであり、10 日および 12 日は終日雲のため、櫻島の噴火の状態は明らかでないが、1946 年の新熔岩流の主体の噴出時期は 3 月 11 日⁽⁴⁾ と考えられている。

(2) 動き：新熔岩流 (Fig. 2) は「1939 年 10 月火口」から噴出されて、途中から東と南との 2 方向にわかれ、ひとつは鍋山と権現山との間を通して黒神に向い (写真 1) 他のひとつは有村に向かった。

黒神側の新熔岩流が 3 月 16 日に確認されたときには、その流速は約 12m/hour であったが、次第に減って 3 月 28 日 6 時 00 分には 2.3m/hour、3 月 29 日 6 時 30 分には 2.2m/hour になり、3 月 19 日には 1 1 線にまで、3 月 30 日には 2 2 線にまで、4 月 5 日には黒神海岸 3 3 線

に達し、6月20日には黒神の東方海中の浜島を埋めて、黒神東方約600mの海中44線にまで達した。

有村側の新熔岩流は、3月19日には11線にまで、3月30日には22線上まで、5月20日には3'3'線にまで、6月20日には有村海岸44線にまで達した。この間、3月30日～3月31日の1晝夜に60m、すなわち2.5m/hourの流速で前進した。

新熔岩流 (Fig. 3, 写真 1, 2, 3, 5) は岩塊状熔岩流であって、直径が約2mの岩塊を積み重ねたような外観をしていて、この岩塊間の割目は3月27日～3月31日に晝なお鮮紅色を呈していた。6月中旬にもほぼ同じようであった。

この熔岩流の表面からは“かげろう”が明らかにたっているのが見え、この熔岩流から約10mはなれても、顔が暖かく感じ、この熔岩流に接触した樹木は炎をあげてもえた。

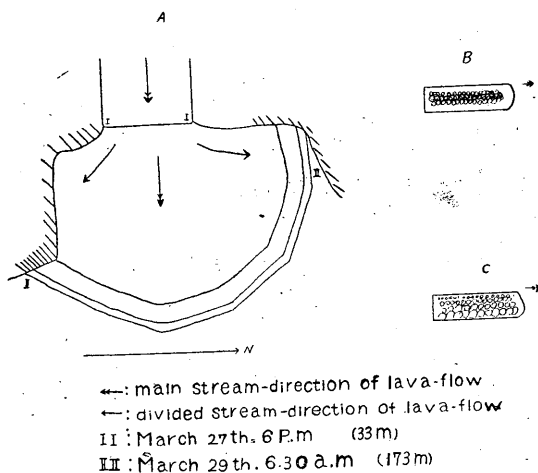
上表面部2～3mの厚さは赤褐色岩滓状を呈していて「ガラガラ」という弱～普通程度の音をたてて30～50cmの岩片にこわれて熔岩流縁辺部地表上に落下する。このとき、赤褐色の煙が数mの高さにまでたちのぼる。

落下したこれらの岩片を下敷きにして、これらの上をころがりながら、熔岩流の主体は前進してゆく。

この熔岩流は、低いくぼ地を一様に埋めてゆく。たとえば、黒神海岸西方約500mの距離にある瀬戸 Narrow (Fig. 3, 写真2) のように、この熔岩流が低い広い川原にでた場合には、ひろがって川原を埋めてゆく。この場合、熔岩流が3月27日18時にこの瀬戸の出口 (Fig. 3, A, II) に達したときには、その先端部は火口側が高く、末端が最も低い3段式階段状をなし、最低端は高さが約10m、幅が33m、前面部は中央部がやや前方にふくらみ出ていたが (Fig. 3, B), 3月29日6時30分には川原上にひろがって扇型になり (Fig. 3, A, II II), その先端部は3段式 (Fig. 3, A) を続け、最低先端部は高さが約10m、その曲線の長さは173mになり、その前面部は下方に近い部分が著しく前方にふくらみ出ていた (Fig. 3, C)。

鍋山と権現山との間の瀬戸を出た熔岩流が広い熔岩原を展開しているのも、こうしてできたものである (写真1)。

Fig. 3. Expansion of the moving lava-flow at the narrow about 500m west from Kurokami coast

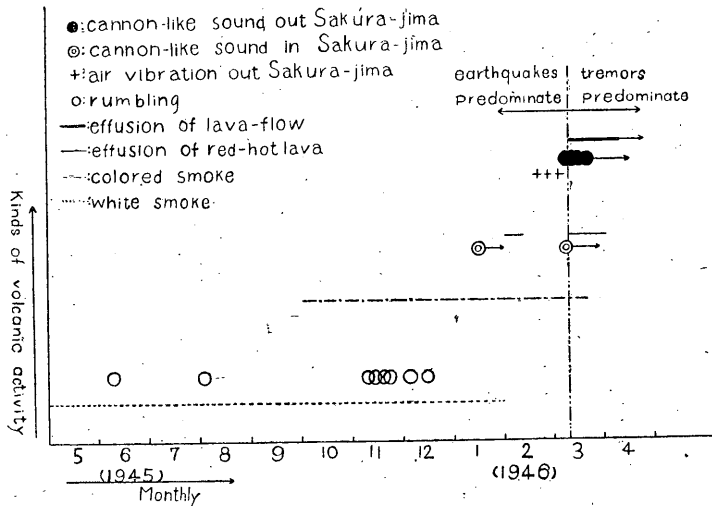


この熔岩流は、黒神・有村に近づいたところには、2m/hour あまりの速度であったから、その前面にある家屋は全部とりこわし分解されて他の場所に運搬され（写真 2, 4）、小麦はかりとられ、林の木はきって“たきぎ”用に運ばれていった。

新熔岩流は、内部は黒灰色堅くち密で、表面部は赤褐色岩滓状を呈し、1914 年熔岩流と外観がにている。その比重は 2.28、その面積は約 $4 \times 10^6 \text{m}^2$ であって 1914 年熔岩流の約 $\frac{1}{4}^{(2)}$ に相当し、その体積は $1.2 \times 10^9 \text{m}^3$ である。

4. 1945 年～1946 年の櫻島の火山活動とその地震 (Fig. 4)

Fig. 4. Volcanic activity of Sakura-jima from May 1945 to March 1946 (observed in and out Sakura-jima)



1945 年は櫻島は白煙を噴出していたが、同年 6 月 10 日・8 月 2 日・11 月 10 日・11 月 12 日・11 月 20 日・11 月 23 日・12 月 3 日・12 月 6 日には鹿兒島市に聞える程度の鳴動が起り、同年 9 月末には有色煙が噴出されて、櫻島内に降灰、1946 年 1 月 30 日には鹿兒島市に降灰があり、櫻島では 1 月半ばに砲声様音が聞え、1 月 30 日～2 月 12 日は夜に赤熱噴石がみとめられる程度の活動に、2 月 25 日および 3 月 6 日には鹿兒島市で空振を感じる程度に、3 月 10 日から櫻島外の加治木町などで砲声様音が聞えるようになり、3 月 11 日ごろに熔岩流の主体が噴出されたようである。以後、日まじしに活動が盛んになり、14～16 日は全活動中の最盛期に達して、15 日には鹿兒島市に砲声様音がきこえ、そののちは活動はおおむね下り坂になって、23 日からさらに衰え、櫻島の一部で鳴動、砲声様音、夜には赤熱噴石が観測される程度になった。

新熔岩流噴出前には、有感地震は観測されなかったが、鹿児島測候所のウィーヘルト地震計記象の調査図⁽⁴⁾によれば無感地震は 1946 年には、1 月に 2 回、2 月に 34 回、3 月に 14 回、こううち、2 月になってから新熔岩流噴出前までおおむね 1 日数回ずつ、新熔岩流噴出後はなくなり、火山性微動は 2 月中および新熔岩流噴出前まで断続的に、新熔岩流噴出期には連続的に現われ、かつ、その全振幅は新熔岩流噴出後増加して 3 月 16 日に最大に達してのち衰えた。

現在知られた範囲内で、次のことがのべられよう。

無感地震月別観測回数が増加して最大に達してのち、減少にうつってから間もなく、新熔岩流が噴出された。かつ、火山性微動は 1 月末から 2 月上旬ごろにかけて目だって現れはじめ、熔岩投出またはそうとおもわれる時期に断続的に起り、熔岩流出期には連続的に起って全振幅を増し、活動最盛期には全振幅が最大に達した。

換言すれば、地震（このたびは無感地震）および微動は熔岩流出の前駆となり、熔岩流出前には地震が、その流出期には微動がそれぞれ卓越し、活動最盛期には微動の全振幅が最大になる。

5. “やましお”

これは山腹ことに中腹以上に豪雨があったときに、降水がおもに山の斜面上の泥砂とともに瀧のように斜面上を流下して山ろくに殺到した一種の泥流を意味している。筆者が調査中、3 月 26 日に持木～古里間に流出中のものを観測した。

この日 11 時ごろ、南岳中腹に「ゴー」という音が聞えてからのちに、この“やましお”がおそってきたとのことである。15 時ごろ、現場では深さが 10cm、幅 50cm の濁灰色泥流が 2m/s の流速で流下していた。

この種の“やましお”の流下した跡は 3 月 26 日～27 日の踏査中、持木～有村間に 2～3 あった。これらのうち、有村部落内のものが最大で、深さが約 3m 幅が約 1.5m あった。

この“やましお”は、山の斜面上に降下した火山灰砂がセメント化されて、この地層の表面部の間隙率が減少したために、この地層上に降下した豪雨はこの地層内に浸透しきれずに、この地層表面の火山灰砂をあらって山の斜面上に沿って奔流し、山ろくに殺到したもののようである。

6. 櫻島の地下水と温泉（海水を含む）（第 1 表、Fig. 2）

このたびの調査の結果、櫻島周辺部の地下水について、2 つの違った区域があることがわかった。

島の南半部は大休、温泉区域であって、黒神・有村・湯之附近をとおって 30°C 等温線が考えられ、その外（海）側の温度が高く、古里が最高 50.4°C を示している。

島の北半部は冷水区域であって、小池・武・西道・白浜・高免をとおる 17°C 等温線が考えられる。

これらの 30°C 線も 17°C 線もともに pH=6.8 である。

島の北西部の西道・藤野・武および西部の赤水はいずれも pH の値がやや小さく、それぞれ 6.6, 6.7, 6.3 および 5.8 である。西道には褐鉄酸化した地層がある。

井戸水は海岸に近いので、海水の影響をうけることが多いようであって、満潮時には水位が高く、干潮時には水位が低くなる傾向がある。

海水は pH=7.7 附近のところが多いようで、島の北側では高免は pH=8.0 であって、その値が高い。

井戸水の pH の値が比較的小さい西道・藤野・武では海水の pH=7.3~7.6 であって、その値が比較的小さく、南側の古里温泉附近でも pH=7.3 であって小さい。

7. む す び

1946年3月の櫻島の噴火について、現在まで得られた観測資料から次のことが述べられる。

(1) 熔岩流噴出約9か月前——1945年6月10日——に、白煙噴出中に鹿児島市に聞えるような鳴動が聞えはじめ、約5か月あまり前——1945年9月末——には、有色煙が噴出されて櫻島内に降灰、約40~50日前——1946年1月半ば~1月末——から、櫻島では砲声様音が聞え、有色煙中に夜は赤熱噴石がみとめられはじめ、約2週間前から鹿児島市で空振が観測され、熔岩流出活動時には櫻島外に、その最盛時には鹿児島市に、砲声様音が聞えた。

(2) 鹿児島市(測候所)観測の無感地震回数が増加しはじめるとともに、櫻島は有色煙・赤熱噴石活動をはじめ、この無感地震月別観測回数が増加して最大に達してのち、減少に移ってから間もなく、換言すれば、無感地震日別観測回数が数回ずつ続いていたのが、急に減少して1回またはなくなってから間もなく、熔岩流が噴出された。

(3) 地震および微動は熔岩流出の前駆となり、熔岩流出前には地震が、その流出期には微動がそれぞれ卓越し、活動最盛時には微動の全振幅が最大になった。

(4) 1946年3月11日に熔岩流主体が火口から噴出されてのち、東方黒神方面と南方有村方面に分流した。これらのうち、黒神方面の熔岩流は3月29日には約2.2m/hourの流速を有し、4月5日には黒神海岸に、6月20日には黒神東方約600mの海中にまで達し、有村方面の熔岩流は3月31日には約2.5m/hourの流速を有し、6月20日には有村海岸をこえて海中に達した。

(5) 新熔岩流は岩塊状熔岩流であり、その熔岩流末端部では、その中央部附近の岩塊が最大であって、これらの岩塊間の割目は3月末には晝なお赤熱鮮紅色にみえ、その熔岩流の表面部は岩滓状を呈していた。

(6) 新熔岩流はその表面部および側面部が岩塊片となって落下した岩屑を下敷きにしながら、地形の低い凹所を埋めつつ前進していった。この場合、熔岩流の末端部は前進方向に凸面をむけて

験 震 時 報

いた。

(7) 新熔岩流は約 $4 \times 10^6 \text{m}^2$, すなわち, 1914 年熔岩流の約 $\frac{1}{4}$ の面積を有し, 約 $1.2 \times 10^3 \text{m}^3$ の体積をもっている。

(8) 噴火の最盛時が過ぎてのち, 活動衰退期中の 3 月 25 日 ~ 31 日の活動毎噴出時の噴火勢力は約 $1.8 \times 10^{16} \text{erg}$ であった。この活動時には, 火口の東方約 2.5km まで地響き, 約 4km まで砲声様音, 約 4.5km まで空振, 約 5km まで鳴動が観測された。

(9) 櫻島の南 ~ 南西ふもとには, 豪雨後に “やましお” があつた。

(10) この噴火の結果, 熔岩流出のために, 黒神および有村の両部落が埋められ, 降灰砂のために, 櫻島全島の山林, 畑地が被害をうけた。

(11) 櫻島周辺部の地下水は 2 つの違った区域にわかれている。すなわち, 島の南半部はおおむね温泉区域であつて, 北半部は冷水区域である。

(1947 年 5 月 5 日)

参 考 文 献

- (1) 鹿兒島測候所 (藏重一彦) : 昭和 14 年 10 月 ~ 11 月櫻島噴火報告
 - (2) 本 多 彪 : 昭和 14 年 10 月下旬の櫻島火山活動調査報告
 - (3) 岡 部 龍 信 : 櫻島火山活動調査報告
- (1), (2), (3) は験震時報第 11 卷第 1 号
- (4) 中央気象台 (広野卓藏技官一行 4 名) : 櫻島噴火報告第一報 (昭和 21 年 4 月 1 日)

第 1 表 1946 年 3 月 26 日 ~ 30 日の櫻島の地下水・温泉 (海水を含む) 観測表

種 別 観測地	観 測 時	気温	泉温	pH	水位	水深	日射	記 事
	月日時分	°C	°C		m	m		
1. 赤水 Akamizu	3. 26. 13.30	15.3	17.3	5.8	2.04	0.93	なし	降灰砂のため地表がやや黒くなる, 海水面の水温は 18.2°C.
2. //	14.30	16.5	18.8 18.6*	—	11.87	0.68	//	*水底
3. 野尻 Nojirj	15.40	15.6	18.3*	6.8	11.50	0.75	//	降灰砂のため地表がやや黒くなる, * 水面, 水底おなじ.
4. 持木 Mochiki	16.40	15.6	12.3	6.9*	—	—	//	* 天水井戸の水, 火山灰はあまりはいっていない.
5. 湯之 Yuno	17.40	14.3	30.2	7.7	2.50	0.35	//	この井戸水は微鹽味, 飯たき水に使用され飲料水は天水を使用する. この水位は満潮時には地表下 1.7m まで上昇する.
6. 古里 Furusato	3. 27. 8.30	15.9	50.4	6.8	—	—	//	波うちぎわの北方約 4.5m 以北にある南北 6.3m, 東西 7.5m 深さ 0.3~0.4m の温泉池, この池の東端北端から南方へ 3m の地点で観測, この池の湯面は海水面以高約 0.7m, 湯面上に白色噴気極少量 1m 上昇.

1946年 3月の櫻島の噴火——本多

種別 観測地	観測時	気温	泉温	pH	水位	水深	日射	記 事
	月日時分	°C	°C		m **	m		
7. 古里 Furusato	3.27. 9.00	16.7	28.6	6.9	1.75 ^{**}	0.25	なし	6 温泉池の北縁面の北 6.0m にある井戸、この井戸の水位と温泉池面はほぼ等位、井戸の底に約 0.3m の厚さの火山灰たまる、水は微塩味。
8. //	9.00	16.7	19.8	7.3 [*]	—	—	//	かなり塩からい、波よせぎわから白色噴気極少量 0.3~0.4m 上昇
9. 有村 Arimura	13.30	17.1	35.5	6.8	3.32 ^{**}	0.85	//	水は微塩味、飲料水は天水を使用する。
10. 黒神 Kurokami	3.28. 9.20	17.3	20.1	6.8	3.4 ^{**}	2.4	//	黒神ただ一つの淡水の飲料水井戸。
11. //	10.15	17.6	28.5	6.6	1.12	0.37	//	水は微塩味
12. 黒免 Kōmen	3.29. 15.50	18.5	14.3	6.8	3.3	0.84	あり	この井戸は波よせぎわの西約 10m、海水面以高約 1.5m 水は極微塩味。
13. //	//	//	17.2	8.0 [*]	—	—	//	草綠色、塩味がやや強い。
14. 福良 Fukura	3.30. 8.35	12.5	17.5	6.4	7.2	0.8	//	水は極微塩味
15. //	9.15	14.7	16.5	7.7 [*]	—	—	//	
16. 古良向 Koramuki	9.50	15.6	15.5	6.9	10.95	1.55	//	この井戸には屋根があり、水は塩味がなくておいしい。
17. 鍛冶屋向 Kanjyamu	10.30	15.7	17.3	6.8	2.25	1.65	//	この井戸に屋根があり、水は微塩味。
18. //	//	//	17.5	7.7 [*]	—	—	//	
19. 二俣 Futamata	11.05	16.3	17.3	7.1	3.92	1.05	//	波よせぎわから内陸へ 30~40m、海水面以高約 2m の郵便局の井戸、井戸に屋根があり、水は極微塩味。
20. 松浦 Matsuura	11.50	16.3	16.9 17.0 [*]	7.1	4.55	0.65	//	井戸は波よせぎわから南へ約 50m、海水面以高約 5m、井戸*水底には屋根があり、水は極微塩味。
21. //	//	//	—	7.3 [*]	—	—	//	
22. 西道 Saidō	12.30	16.7	17.5 [*]	6.6	3.65	0.35	//	井戸は波よせぎわから内陸へ約 50m、海水面以高 7~8m、附近海岸に褐鉄鉱化した岩塊層がある、* 水面、水底おなじ。
23. 藤野 Fujino	14.25	16.6	16.1 [*]	6.7	3.00	0.65	なし	井戸は波よせぎわから SE60~70m、海水面以高約 5m、* 水面、水底おなじ。
24. //	//	//	17.3	7.4 [*]	—	—	//	
25. 武 Take	15.00	16.1	16.8 [*]	6.3	2.45	0.65	//	水は極微塩味、* 水面、水底おなじ。
26. //	//	//		7.6 [*]			//	
27. 赤生原 Akōbai	15.50	15.5	15.8	—	2.85	0.65	//	井戸は波よせぎわから内陸へ東約 40m、海水面以高約 4m。
28. 小池 Koike	16.45	15.5	16.7 16.8 [*]	6.8	3.20 ^{**}	0.65	//	井戸は波よせぎわから内陸へ約 50m、海水面以高約 3m、水は極微塩味。

註：水位は地表～水面の距離、**は水位が満潮時には上昇し、干潮時には下降する。*は海水であって、その泉温は海水面の水温をあらわす。